

キリストの光 光のキリスト

死んでも
生きる

四旬節第5主日 3月9日

(ヨハネ11:1-45 または11:3-7, 17, 20-27, 33b-45)

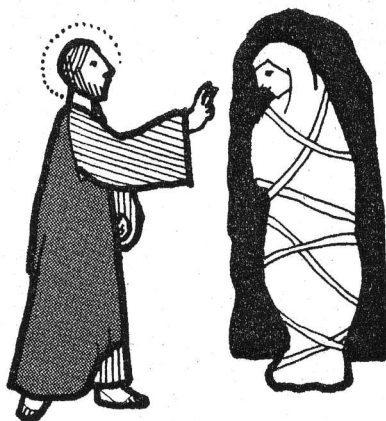
ミサの最も中心部分に記念唱がある。「信仰の神秘」という司祭の言葉に会衆が応える。「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで」

イエスの弟子たちは、イエスの死を目の当たりに見る。十字架の上で死んでいったイエス。その死は人に語るにはあまりにも無残な死であった。イエスは墓に葬られる。弟子たちは沈む。その弟子たちにイエスが再び現れる。確かに死んだはずのイエスが。弟子たちは命を懸けてこの出来事を語り始める。もう、黙っていることはできない。

だれも自分の死について語ることはできない。死ねば、もう何もすることができない。人が死を語るとすれば、それは他人の死である。

四旬節の第五主日。ミサで読まれる福音はマルタとマリアの兄

弟ラザロが墓から出てくる話。この出来事の前にイエスはマルタに言われる。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じる



か」と。

イエスが大声で叫ぶ。「ラザロ、出て来なさい」。死んだはずのラザロが墓から出て来る。この出来事を目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。この話の結びに、ヨハネ福音書の記者はマリア

を再び登場させる。イエスが来たとき、マリアは家の中に座っていた。

「マリアのところに来て、：イエスを信じた」と記しているのである。ラザロの出来事を見ても、すべての人がイエスを信じたのではない。「多くの」人は信じたが：。

マリアのように「座る人」でないと信じることはできないのではないだろうか。イエスが葬られた墓は空であった。見て、信じる。その間に「座って思う」のではないと信じることはできないのではないだろうか。

恩師の死を思い出す。

ある日、同級生から電話があった。「先生が神父のおまえに来てほしいと言ってる。病院に：」。

久しぶりに会った。恩師はずっと前に教会や信仰に関することや物をすべて処分し、気持ちの整理をしていた。教会やカトリックの信仰とは縁を切るつもりでいたらしい。それでも大切な方から洗礼

の記念に頂いていた小さなメダイは捨てることができずにキーホルダーに付けたままにしていた。病床でそのメダイにふと目が留まる。「死の準備を始めなければ：」と恩師は思った。

彼にとつて死を受け入れることは、復活を受け入れることでもあった。イエスが復活したという「奇跡的」なことを信じることでではなく、イエスの「信じる者は死んでも生きる」という言葉を信じることであり、自分の復活を信じることも

でもあった。

その半年後、恩師は帰天する。静かに：。

死んでも生きていると、わたしも信じる。

今週の福音

10 日・月	ヨハネ	8・1	— 11
11 日・火	ヨハネ	8・21	— 30
12 日・水	ヨハネ	8・31	— 42
13 日・木	ヨハネ	8・51	— 59
14 日・金	ヨハネ	10・31	— 42
15 日・土	マタイ	1・16、18	— 21、24 a

または ルカ 2・41—51 a